徹夜の行進で疲れ果てて、北谷校の教室に寝ていると、明方から雲霞のような黒星機が現われて、爆音高く襲撃をはじめた。北谷に近い読谷飛行場への投下らしいが　百雷落下さながらの物凄い爆弾投下のため、爆風で地響きが続き、窓ガラスの破片や屋根瓦の破片などが飛び散る音も気味悪く聞こえた。四人とも、あまりの恐しさに、堅く抱き合った。

晩方になって爆音はやっとやんだ。命びろいをしたことを神に感謝しながら壕を出た。さいわい月は柔い光を人びとに与えてくれた。月の光をたよつて徹夜の歩みを続けた。

勝つまでは、どんな苦労も物ともせずにみなある限りの力をふるって歩く足どりも涙ぐましい感じがした。

老幼男女の群れは道いっぱい溢れているが、みな無言の行列である。

那覇を出発して四日目は過ぎ去った。

壕を捜すため山手に登ってさまよっていると、やっと小さい赤土の壕を見つけて狭苦しい所に四人はすし詰めにされた思いでひそんだ。ここは恩納村の入口であったが遥か沖の彼方は、無数の米艦に取り囲まれて今にも上陸しそうな危険が追っていた。

一瞬でも早く、ここを突破しないと危険だと思い、空襲がやむとすぐ前進をした。

後のほうから荷馬車のきしる音がしたので、うらやましげに見上げると、幸い泊校での教え子の家族が乗っていて、荷馬車をとめて乗せてくれた。あまりの有難さに感謝の涙が溢れるのみであった。

八人の客を乗せて馬車は北へ北へと走った。大勢の避難民たちを追い越して前進するのも何となくすまないような気もしたが、戦争ゆえ仕方がなかった。この荷馬車で名護まで乗せてくれるとのことで、ただ感謝の念でいっぱいであった。

びしょ濡れの逃避行

恩納村を過ぎた頃、照明弾の赤紫色の異様な光が射し、みなに不安な気持ちを与えた。

空はあくまでも曇り、月さえ拝まれない。やがて雨が沛然と降り、ゴザ二枚を八人でかぶったまま全身びしょ濡れになった。

馬車は、むちを打たれながらまっしぐらに進んで行った。しばらくして雨はやんだが、びしょ濡れのため気持ちが悪くなった。やっと名護に着いて、みなさんと名残りを惜しんで別れた。

羽地村田井等に住む叔父の家まで約四キロメートルの道程だが、年寄りや幼い子を連れての歩みはなかなか困難で、泥だらけの道を濡れた荷物の重いのを肩にかけ左手で幼児の手をひいて、やっとその家に着いた。

叔父の家族は喜んで迎えてくれ、久し振りに腹いっぱい食べて、暖い床にぐっすり寝入ることができ、感謝の念でいっぱいであった。ここでも昼中は壕の中で過ごした。

与那山の生活（四月一日～五月一六日）

羽地村の叔父が馬車の交渉をしてくれて国頭村与那の叔父の家まで行くことになった。

晩の八時頃、別れを告げて家族四人は馬車に乗り、国頭村与那へと向かった。

馬車は北へ北へと進んだ。馬は鞭を打つたびにスピードを増して走るので全身ゆり動か

された。夜明けやっと叔父の家へ着いた。みなさんが温く迎えてくれた。久し振りに小川で浴び、洗濯をして、人間らしい生活を味わい気持ちよくなった。

ここは見渡す限り高い山々にかこまれているので、安全地帯だと予想していた。

ところが二、三日たつと、急に情勢が悪化した。中部一帯から上陸した米軍が、辺戸岬に陣地を築くために、トラックやジープが幾十台も往来し、山の人たちの不安は日一日と増した。

昨日、隣り村に米兵が上陸したらしいとの噂を開いたので、叔父が造ってくれた与那山入口の避難小屋に、すぐ引越した。

山の仮小屋は、屋根や壁をすすきで造り、腰を曲げて入るほどの薄暗い狭苦しい小屋で、すき間風が入り、雨もりもした。

晩は、蚊の大群が寄ってきて寝づらいので、叔父の空家へおりて休む毎日であった。

食糧のことが何よりも心細かったが、叔父の家から分けてもらった。しかし、いつかは食糧の補給も困難になることを予想して、水のようなおかゆを炊いて食べることにした。

朝ごはんがすむと、毎日山の竹やぶの中にひそみ、首だけを出して、遥か大通りのようすをうかがった。上陸した米兵たちは、幾十台と走るトラックやジープに乗って北の方へ行く。時たま林道入口で発砲する音があたりの静けさを破って、気味悪くひびきわたり、山の人びとに不安の念を与えた。

昼は山かげにかくれて退屈まぎれにしらみ退治をするのが日課であった。山の小川の清水で体をふいたり、お湯で衣類の消毒をしたり、日光消毒をして手入れを繰返しても、白いしらみが群がって全身がかゆく夜も眠れなかった。

日本兵の食糧あさり

月日はいつしか過ぎ、山の生活にも馴れてきたので、早朝から畑へおり、小さい芋を拾いに行き、二〇個ぐらい袋に入れて持ち帰り、焼き芋をして食べた。ニンニクも拾って焼いて食べ、食糧を求めてあちらこちら歩きまわった。

食糧難だけでなく、精神的にも疲労を感じ、気力を失いがちになった時に、やみ肉を買った時の嬉しさは、忘れ難い思い出である。

ある日、日本兵が山の小屋のあちらこやらを訪れて「自分たちは斥候兵で、変装をして山からおりて来たが、隊長以下大部分は名誉の戦死をされた。しかし、戦はまだ終わらない。わが日本軍は最後まで戦って必勝する覚悟をしている。天長節の佳い日を選んで、日本の大艦隊が出撃して、大戦果を挙げるように作戦をしている。みなさんも苦難を忍んでその日を待っててください」と、避難民たちを励ますように語った。

山の避難民たちは、日本兵らを信頼して、少ない食糧の中から「芋」などを与えて力づけた。

ところが、天長節の日を期待しても、大艦隊の出動は皆無の状態で情けなく思った。その後、噂によると、大宜味村の部隊では、日本兵が住民を海辺に集めて手りゅう弾で殺し、食糧を奪って逃げたという。

山ではたびたび日本兵が出没して避難民の食糧を奪ったり脅かす状態で、毎日が何となく不安な生活であった。

捕われの身　（五月十七日～五月三一日）

一カ月余も山の生活を続けたので、山に登ったりおりたりするのも、だいぶ上手になった。

五月十六日の夕方、洗濯物をとりこむために外に出ると、アメリカの三兵士（二人は二世）が、ひょっこり避難小屋に現われた。

幼い娘は異人を初めて見て泣くし、母は身ぶるいして、片すみにかくれた。わたしは臆病の伯母をかくして、彼らの姿を見せないようにした。

「山は危ないから民家へおりてください」と二世が言った。無言のまま顔を見あわせると、「明日から山を攻撃します。敗残兵が山にかくれているためです。衣食住を与えますから、みなさん明朝おりて下さい」

と、再三頼むようにやさしく言った。そして、珍しい缶詰やお菓子などを入口へ置いて去った。その晩は、心配のあまり、一睡もできずに夜を明かした。

翌朝、昨日の米兵三人が避難小屋へ再び訪れて、

「すぐ民家へおりてください」と言って手まねきをした。昨日の姿と違い、肩には鉄砲、腰にはピストルをさげて、ものものしいようすであった。赤いちぢれ髪、青い眼さえ異様に感じるのに、武装をしている姿は恐ろしさを増すのみであった。

米兵は荷物を持ったり、老人や幼児の世話などをいろいろ親切にするので、日本兵にスパイだと思われて殺害されはしないかと不安でたまらなかった。

いよいよ捕われて、民家へ連れて行かれる時、付近の山からおろされた三〇人余りの避難民たちは三人の米兵たちに監視されながら歩く。みんなの不安な気持ちで歩く姿はみじめであった。

「いったい戦争はどんな状態になっているかしら」。米兵の話によると、「日本は敗戦したので、みなさんをアメリカ軍政府が保護して衣食住を与えます。安心してください」といって、みなを班長さんの家へ集めた。

山からおろされた人たちは、みな落着きのない眼をして不安そうなようすであった。

やがておにぎりと珍しい肉や卵の缶詰が配給された。みんな初めのうちは毒が入っていると疑って食べようとしなかったが、米兵が試食したので安心してむさぼるように食べはじめた。そのようすを見ると、敗戦民のあわれさをつくづく感じた。

北部地区のキャプテンのラブレス中尉は、七カ国の言葉が話せる言語学者で、元検事の厳しい将校として有名な人で、住民たちが、こわがっていた。朝食をすまして間もなく、「ごめんください」という声が表のほうから聞こえたので、ラブレス中尉であることを直感した。

やがて訊問が始まった。

ラブレス「おはようございます。あなたは、先生だそうですね」

春子「いいえ、先生ではありません」

ラブレス「班長さんから先生だと聞きました。あなたのご主人は兵隊ですか」

春子「いいえ、兵隊ではありません」

ラブレス「あなたのご主人は、どこにいますか」

春子「東京の大学で勉強をしています」
ラブレス「あなたは、東京の人ですか」
春子「沖縄の人です」
兵隊というと国体に関することを問われるので、うまくごまかして二人の対話はやっと終わってほっとした。

日本兵が住民殺害

五月二〇日の夜中、山から降りた敗残兵が班長さんをスパイだと疑って、二人組が早朝現われ、班長さんの頭を棒でなぐり、避難民の食糧（配給品）を全部奪い、放火して家を全焼させて逃げて行った。班長さんは幸いに一命はとりとめたが、班長宅に雑居していた避難民たちは、配給された食糧もすっかり失って再び着のみ着のままになった。しかし死者がいなかったのは不幸中の幸いだった。敗残兵の再度の横暴に対し、みな怒りと恐怖心を抱くのみであった。
早朝、ラブレス中尉が避難民を集めて、「みなさん与那山は敗残兵が出没するので危険です。当原という部落へ引越します。あそこは米軍の部隊があるから安心して暮らせます」と引越し命令がくだり、二台のトラックに分乗して移動した。
割当てられた民家に二世帯ずつ雑居生活をすることになった。米兵が夜中も警備するので、みな心強く思った。
しかし、五月二八日のあかつきに再び恐しい事件が起こった。おぼろ月夜に大人の大きな叫び声に続いて、子どもの甲高い泣き声の連発が無気味に聞こえ、間もなく足音がして戸口でぴたりと止まった。
「日本兵に妻が殺されました。子どもはけがをしているし、兄の家族四人は、全員手りゅう弾で殺されました」という悲しい報せであった。ああ人間の運命のはかなさよ。昨日まで、お互いに励ましあった隣組の方が、日本兵の手で惨殺されたのは悲しくてたまらなかった。
翌朝、米軍は日本の敗残兵のいる山に機関銃を発砲することを予告し、飛行機からビラを落とし、避難民に下山するよう警告した。
みな、白い旗をあげて民家へおりはじめた。
【『ぶっそうげの花ゆれて』（退職教職員会婦人部編、（株）ドメス出版）所収】

生命はこんなに強いものなのに

具志川市　赤嶺　とみ子

軍隊内の「階級」意識

上陸が開始され、毎日のように続く戦いは前進どころか後退していく連続であった。今日は安全な地点と思っても二、三日すると退かなければならない。
そんな中で私は日本軍を許せないことがあったのです。それは戦のさなかにけが人がど

んどん壕の中へ来ます。看護婦は血まみれになってくる兵士を手当するわけですが、階級の高い兵士が入ってくると、どんな軽傷でも、階級の低い重体の患者をほうり出し、軽傷の上官をまっ先に手当をしなければいけない。

普通であれば、重傷患者が先に手当を受けるべきではあるが、戦争中の軍隊の規則でもって差別された階級の低い兵士ほど、みじめなものはなかった。手当がおくれて出血多量で亡くなる数は多い。このようなことが毎日のように続きました。夜間、元気な兵士たちが穴を掘り、亡くなった戦友を穴の中にほうり込む、そして重なりあっている姿は何と残酷だろうと戦争のおそろしさを感じました。戦闘がだんだん激しくなり、けが人が多くなると、穴を掘る余裕さえなくなり、林の中、岩影に捨てられていく姿は二度と見ることはできませんでした。

虐　殺

戦いが激しくなるにつれ、現在の壕をひきあげ、次の壕へ移動しなければいけないわけです。この壕には歩ける人、軽傷の人、重体の人もだいぶいますので、移動するときは、歩ける人ということで軽傷を含め、夕方から移動を開始するわけです。ここで上官から「起きられるものはみんな起きてみろ」と命令が下りますと、寝ている兵士もみんな、「ぼくは大丈夫だ、まだ戦える、行けます」と立ちあがり、どうしても立てない兵士は残ります。「準備せよ」との命令で私たちも手早く薬品をととのえて移動の準備をすませ、壕を出て外で待っていると、壕の中では上官の自決命令によって、三十数人が自決をさせられました。二、三秒もたたないうちに、バンバンと音がするとともに、壕を覗くと一瞬のうちに血の海となり、胸の部分に大きな穴のあいている人、左右の手の部分的に切れ切れになっている人、うつ伏せになっている人、さまざまな形で悲惨な姿でありました。

その後再び上官が、自分の命令によって全員が自決したかどうか確認のため、再度壕の中に調べに行き、壕の奥のほうに二人がひそんでいるのが見つかり、壕の外へえりをつかまえられて連れ出されてきました。

ひざまずいてすわらせられた二人の兵士は、ふるえながら「すみません」「許して下さい」「ぼくらも一緒に戦いに行きます」と心からあやまっていますけど、軍国主義教育を徹底して受けてきた若い上官は、二人の必死の願いを耳にせず、「命令を聞かず逃げまわるやつはただちに殺してやる」とか、数多くの暴言をはきながら、日本刀をガチヤガチヤふりまわしたり、天皇に対して申しわけないと、ものすごい暴言の中で、ここで切り捨ててやるということで、二人の兵士の後頭部からひたいにかけて、グシャッという音とともに切られ、一回だけでなく三カ所も同じような切り方で切られているときは、二人のひたいから水のように流れてくる血は二度と見ることはできませんでした。

その時、私はふるえるばかりではあったが、大勢の中から誰一人として二人を助けることもできず、また流れてくる血をとめようとする人もいなかった。それは当時上官に一言も反することは言えない軍国主義であったからです。二人の兵士はとうとう意識不明になり、その場にふせたままでした。二人の変わりはてた姿は見ることもできませんでした。この話をするたびごとに当時を思い浮かべ涙をおさえることができません。

人間の尊い命を虫ケラ同様のあつかい方、そして味方同士の殺しあい、上官の命令をき

かない者は虐殺されていく事実は、本当に許せない行為だと思います。この二人は三〇歳くらいで、たしか、郷里には妻や子どもがいたのではないかと思われます。どうして奥の方へひそんでいたかという動機は知らないにしても、私は二人の心の中には生きて帰りたいという気持ち、自決の前に郷里にいる妻子を思い出したのではと思えてなりません。それに二人の兵士は大腿部にけがをして、不自由な身でありながらも、痛さを忘れ、強制でひざまずきをさせ、このような無惨なことが行なわれました。そのけがもだいぶ痛かったと思います。そこをおさえながらあやまる姿は二度と見ることはできませんでした。助けたい気持ちはあっても、命令ですのでどうすることもできなかった。これが戦争で、戦前の軍国主義を徹底して受けた日本兵の姿であります。

住民を壕から追い出す日本軍

教科書問題で沖縄の住民が次から次へと証言しています。日本軍による住民虐殺の問題と多くの住民が「スパイ」扱いやじゃまもの扱いにされ、多くの住民が虐殺された事実は明らかであります。

私は住民の虐殺は目の前で見ることはありませんでしたが、住民の壕をうばい、日本軍が入った事実はみています。次の壕へ移動する途中、危険を感じたときは、住民を追い出し、日本軍が入るわけですが、その時住民はあてもなく途方にくれ歩き続けるわけですので、途中で敵の銃を受け、倒れて、親は死んでいるのに子どもがそばで、おかあさん、おかあさんと泣いている姿を見ても助けることさえできません。住民の壕は一家族だけでなく血縁が集まって、二、三〇名入る広い壕を何カ月もかかって掘りだした壕だけに避難場所としては最高であった。しかし、日本軍が夜明けになり次の壕へたどり着くことができないときは「よし、ただちに住民の壕を探せ」と命令が下ると近くを探し、住民の壕が見つかると、すぐ報告がされ、住民は壕から追い出される状態でありました。

「兵隊は国を守っている。住民は何も守れない」「沖縄を守りに来ているんだ」と発言すると、住民は何のためらいもなく、「兵隊さんが、私たちの壕が必要であれば、すぐに使って下さい」「どうぞ」ということで自分たちの壕を出ていくとき、敵はどのへんまで来ていますかと、たずねると、「知らん」「お前たちが聞く必要はない」と教えてくれないどころか、住民のたいてあるでんぷんで作った食糧を奪って食べてしまい、終わると皿やわんを投げ捨てる態度は許せない気持ちでありました。突然、食べものが奪われると子どもたちは泣きます。その時も泣くと敵に見つかるということで暴言をふるい、殺さんばかりに日本刀をガチヤガチヤさせながら、子どもをおどかしたり、どなったり、母親に向かい「すぐに泣く子の口にてぬぐいをあてなさい、泣き声で敵に見つかってしまう」と言ったり、それでも泣くと早く遠くへ逃げなさい」とかで、むしろ住民を守りに来たはずの日本軍は守るどころか、住民を死に追いやったのと同じです。

日本軍に壕をうばわれなければ、一〇万人以上の犠牲者はおそらく出なかったでしょう。軍国主義の教育はおそろしいことです。

「敵は来ておらん」と住民をスパイ扱い

子どもとお年寄りをかかえて自分たちの壕を後にして出ていくわけですが、住民はどこに敵が上陸しているか、ぜんぜんわかりませんので、足のむくままに行きます。そこで同じ沖縄の人でありながら「敵はそのへんまできています」と教えることもできなかった。それはもし私たちの口から言うと、スパイ容疑で殺されますので、その時は「さあどのへんまで来ていますかね」というくらいしか返事ができない。「お年寄りは、ああそうですか」と言ってまた同じことを兵隊に聞きますと「敵は来ておらん」と安心させるかのようにいうのであった。住民は「弾丸の音が聞こえますよ」と言いながら、向かっていくところはやはり敵のいるところである。私たちは危険を知りつつも教えることができなかった。心の中ではすぐに弾丸にあたるのではと思いつつも、住民を見送り、後ろ姿しか見ることはできなかった。壕から出された住民は戦いの中に入るわけですから、壕を出て途中で爆撃をうけて道路で血をあびて苦しんでいる人もいれば、死んだ母親の背中で子どもが泣きわめいているけど、助けることさえできなかった。道路に横たわり、出血多量のため意識を失っているお年寄りの方や子どもたち、そして中には「兵隊さん助けて下さい」と叫ぶ人もいましたが、その人たちも助けることはできなかった。軍隊は上官の命令なしには行動することはできないのであります。気持ちのうえでは助けてあげたいと思っても勝手にはできない。それが軍隊です。

爆撃で大けが ― “死人”として置き去り

私は爆撃をうけ、一瞬の間に意識不明となり、気がついた時は夜中でした。眼がさめたとき、周囲は妙に静かでした。手さぐりで傍の寝ている人たちをさわると身動きもせず、一言もない。びっくりして周囲を再び手さぐりをすると、みんな死人であった。私は自分の受けた傷さえ見当がつかず、ただぼう然として夜が明けるのを待っていました。その時の傷のいたみはおもに眼球であった。さわってみると右眼がとび出し、眼の側の方は傷をおい、そして頭のあちらこちらが血だらけになっていました。あわてだし、自分のもっている三角巾を出して頭にまきつけました。何の手当もほどこされてなく、そのままでした。たぶん、死んでいるものと思い、置き去りにされたのかもしれません。しかし人間が人間であるならば、たとえ死にかけようとする人であっても手当くらいはほどこしたでしょう。戦争というものは人間でありながら人間でないことが事実ありました。

しかし置き去りにされた兵士たちは数十人だけど、みんなが完全に死んではいなかった。少しばかり息をする人、意識はないけど出血多量で、口だけもぐもぐさせる兵士、そして心臓がかすかに動いている兵士、さまざまな形でいた兵士たちが、一晩、二晩、三晩めにも息をひきとった。手当すらほどこすことのできなかった自分はとても悲しかった。自分も傷を負い、やっとのことで意識はとりもどしたけど、その苦しみは口に表現できないほどの苦しみであった。その痛みと、一人残った不安とが重なり、そしてもっていた薬品袋までがうばわれたことで手当もできずそのまま放置してありました。

少々元気になつたので、次の壕へと探しもとめていった。持っているのは手りゅう弾だけ、そこでもやはり何の手当もされないまま放置された人がいて、薬もなく底をついていました。しかしそのままではと思い、水をくんできてふっとうさせ、しばらくおいて、傷口を洗ったりするだけでありました。治療というほどではないのですから、翌日になりま

すと、ウジがいっぱいでした。
壕に集まった兵士たちは傷を受けたものばかりでしたが、わたしも含め兵士たちが手にしていたのは手りゅう弾だけでした。集まってきた兵士は戦える身体ではなかった。自分の身を守る手りゅう弾だけであった。わたしも敵に見つかったときは、す早く自決をする覚悟でいたので三発の手りゅう弾は身から離しませんでした。

【「ぶっそうげの花ゆれて」（退職教職員会婦人部編（株）ドメス出版）所収】

日本兵が幼児殺害

旧喜屋武村字山城　仲門光利　（当時十六歳）

兵隊は　わたしたちの食糧を　これから斬り込みに行く　戦争は兵隊がやるのだから…と言って　とって食べていました

こちらは　子どもたちだけは　二、三日前に炊いた糸のひくオニギリをあげて　おとなたちは何も食べないで　見ているだけでした　こっちは何もわからないと思ってでしょうね　切り込みに行くんだから食糧よこせ　と拳銃でおどしましたよ　むりやりに奪って行きおったんです　自分だけ生きて本土へかえっていこう　という考えだったと感じました

その翌日ですよ　子どもがいたらまたこっちにも爆雷かけられるから　といって　三才以下はこつちで処理する　といってですよ　三才以下は五名いたんです　それに注射やったんです　この五名のなかには　わたしの弟と　姪もはいっているんです

子ども五名は殺すというから　わたしたちは壕から出ますから　と相だんしたんですよ

隊長に　そうしたら　君たちはスパイやるかもしれないから　といって　門衛を立ててもう一歩も動かさないわけですよ　そうして　五、六名で来て　弟たちを一人ひとりつかまえて　注射をしたんですよ　わたしはどうにかして弟と姪を助けようと思い　この壕から出ますから　とお願いしたんですが　もう　どうにもならなかったんですよ

その翌日の朝ですよ　住民が生きているのは君たちだけだから　アメリカにとらえられて戦車にしかれるよりは　われわれが処分してやろう　と言うのです　住民を処分してのこりの食糧をぶんどる考えだったんですな　そう言われたので　わたしたちはだまっていました

八時ごろ　その話がでて　もたもたしている時にですよ　ちょうどいいぐあいに　アメリカがこの壕を発見してですよ　爆雷をこっちに投げこんだんですよ　そのとき　この兵隊たちは入口にいたのですから五、六十名はやられましたね

【「平和への証言」（沖縄県生活福祉部援護課）所収】

最後の斬込隊

東風平村　長嶺　オト　（当時三十三歳）